

# 子ども食堂 こんな工夫

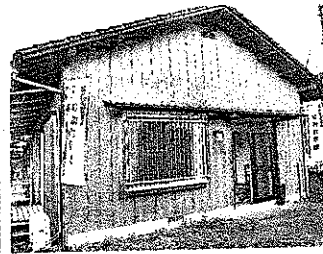
## 学習支援加え存在感 行政の支援引き出す

貧困対策や居場所づくりの拠点として全国に広がる子ども食堂。7月28日の生活面で、運営を維持する難しさや公的支援のあり方を報じたところ、資金不足を補うためのアイデアや工夫が数多く寄せられた。イベント会場に募金箱を置いたり、資金集めのスタッフを置いたり……。その一部を紹介する。

(山中由樹)

大分県南部、人口約3万6千人の豊後大野市。住宅街に並ぶ民家に午前7時、13人の小学生が集まった。

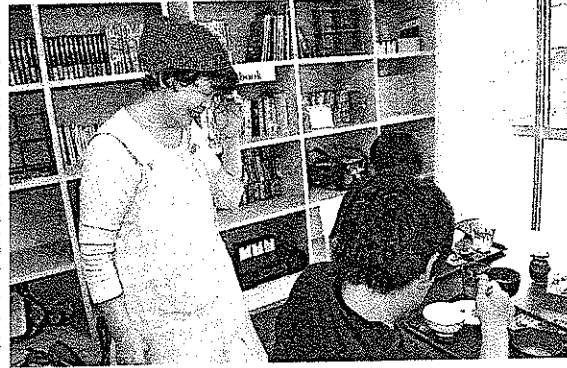
平日に毎朝開かれる「すみれ学級」の子ども食堂。子どもは机に並べられた白米、みそ汁、酢の物、デザートのある朝食を作ってもらえない子どもが集う。



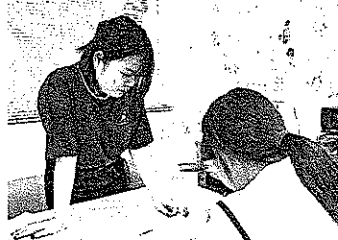
地域住民が民家を無償で提供し、6人が交代で調理している。神田美智子さん(76)はその一人。「朝食が作れない家庭は田舎でも結構あります」と話す。

すみれ学級は豊後大野以外に別府、大分と県内3市7カ所で運営している。週1〜5回と頻度に差はあるが、朝食を2カ所、夕食を5カ所で無料提供する。

3年前、大分大経済学部と協定を結んだ。夕食を提供する4カ所などで、大学生らが子どもに勉強を教える。昨年度は延べ約8千人が利用した。



④地域住民が民家を無償で借りているすみれ学級三重教室のすみれ学級で朝食を出し、子どもたちと雑談する神田美智子さん。いずれも大分県豊後大野市三重町



すみれ学級で夜、中学生に勉強を教える大分大生の富場美咲さん。大分市豊后西町

こうした取り組みが評価され、昨年4月、県から公益財団法人に認定された。県ごとも、家庭支援課の担当者は「子ども食堂が」食事だけでなく幅広い子どもの居場所になっていると話している。公益財団法人に寄付するのと、所得の控除を受けられる。榎田雅文事務局次長(66)は「税制上の優遇措置もあるが、公益財団法人になって社会的な信用度も増した。すみれ学級への寄付額は2017年度まで年150万円ほどだったが、昨年度は約800万円に増えた。

万円に増えた。

県歯科医師会とも連携する。歯ブラシや歯磨き粉を無償提供してもらい、子どもたちは歯科衛生士から歯磨き指導を受けている。

そつりん社長の藤井理事長は「子ども食堂は本来公的な仕事。行政を振り向かせる努力が必要だ。存在が大きな力は行政も支援せざるを得ない。行政の支援を待っているだけではだめだ」と話す。

ただ、すみれ学級の単体の収益は赤字。藤井理事長の本業の収益などから補填している。

## 「大人食堂」で募金呼びかけ 資金集め専門スタッフ活躍

約10人の住居ボランティアが運営する愛知県津島市の「つしまごも食堂」は黒字だ。食堂は日曜日の昼間に開く。地域の農家やスタッフが食材の多くを無償提供する。食事は無料で、毎回70人近くが参加している。

力を入れるのは大人へのアプローチだ。食堂にやって来る約3割が子どもの保護者をはじめとする大人。会場に募金箱を設置すると毎回約1万円集まる。近くの喫茶店にも置いている。

8月には1千円の会費で「チャリティ大人食堂を開いた。ビールや日本酒を用意し、約50人の地域の大人が楽しんだ。募金箱を置いたところ、約6万4千円が集まった。谷口雅子代表(48)は「イベントは大人も楽しめることが重要。大人の参加が多ければ寄付や資金も集まる」と話す。山口市のNPO「山口せわ

## 県内郵便局に案内チラシ

農林水産省が子ども食堂の運営者を対象に運営上の課題をアンケート(17年)で聞いたところ、「来て欲しい子どもや親に来てもらうことが難しい」が42.3%と最も多く、「運営費の確保が難しい」(29.6%)を大きく上回った。

こうした状況を踏まえ、滋賀県内の子ども食堂をサポートする県社会福祉協議会は9月、県内の郵便局と協定を締結。県内全230の郵便局が、近く子ども食堂の開催日程を知らせるチラシなどを掲げていく。

県社協の谷口郁美事務局長は「地域に根ざした郵便局と連携して子ども食堂の認知度を上げ、地域の中での支援者を増やしたい」と意気込んでいる。

ウやつながりが重要。色々な立場の人に協力してもらおう」とが大切」と話す。

こうしたスタッフはファンドレイサーと呼ばれ、欧米で定着しており、日本でも約10年前から広がる。認定NPO「日本ファンドレイシング協会」(東京)にはファンドレイサーの資格制度がある。約1200人が資格を持ち、NPOや財団法人などで活躍している。